

「二人称的観点」からみたカント倫理学

——ダーウォールによる解釈の検討を通して——

小川 泰 治

はじめに—why be moral? 問題とカント、ダーウォール—

なぜ私は道徳的であるべきなのか。この問いは、「規範性の源泉」⁽¹⁾を尋ねる問いとして、古代のプラトンに始まり現在に至るまでくりかえし論じられてきた哲学・倫理学上の古典的な問題のひとつである。⁽²⁾道徳的に生きることが自身の利益にもならずそれがかえって自らを苦しめることになるうとも私が道徳的に生きねばならないとすれば、それはどうしてだろうか。それはたとえば道徳法則のもつ普遍性かつ必然性ゆえだろうか。それとも目の前の他者が私に向ける訴えのもつ切実さによるのだろうか。

この問題を考えるうえで、久重忠夫による「対法的倫理学」と「対人的倫理学」の区別を導入したい。⁽³⁾対法的倫理学とはカントを典型例とする道徳法則や義務を中心とした倫理学であり、当為 Sollen を語る規範倫理学の多くはこのタイプに属する。久重によれ

ば対法的倫理学は法のもつ普遍性の側面を強調することで、結果的にそこからはみだす個々人という面が出てくるが、これに対して現実の個別具体的な人間関係を主眼に考える——たとえば和辻哲郎やレヴィナスのような——倫理学が対人的倫理学である。⁽⁴⁾むしろあらゆる倫理学がこの区別のいづれかに厳密に振り分けられるわけではないし、ほとんどの倫理学はその主張のなかに両側面を有しているといえるかもしれない。だが、さしあたり対法的——あるいは普遍的、客観的——な面と対人的——あるいは個別的、問主観的——な面のどちらがより根本的な問題として論じられているかという視点に立つことは、その倫理学の骨子を把握する一助となるように思われる。

イマヌエル・カントの倫理学が対法的倫理学に大きく傾いていることに疑いの余地はないだろう。確かに、定言命法のいわゆる人間性の定式 (Vgl. IV, 429) ⁽⁵⁾では、他者との相互尊重による対人関係も論じられるものの、それらはあくまで道徳法則との関係を根拠として私たちに指示される命令というかたちをとっている。なに

が道徳的であるのか、そしてなぜ道徳的であるべきかは、他者からの要求によってではなく、実践理性と道徳法則によってアプリアリに規定されている。カントの立場からすれば、他者関係に意志の規定根拠を見出すことは「他律 Heteronomie」の危険性をいつでもはらんでいる。

これに対して本稿で取り上げる倫理学者スティーブン・ダーウォール Stephen Darwall は、カント倫理學にむしろ積極的に対人的倫理學としての「二人称的觀點 second-person standpoint」を見てとる論者である。しかし、さきに触れたように、またのちに詳しく確認するように、そのような解釈には常に「自律 Autonomie」ではなく「他律」を意味するのではという疑念がつきまとう。また、しばしばカント倫理學に向けられる「独我論」や「他人不在の倫理學」⁽⁶⁾といった評からすれば、他者を必要とする二人称的觀點をカント倫理學に認めることの困難も存するだろう。このような問題にもかかわらず、ダーウォールはなぜ、そしてどのように、カント倫理學を対人的倫理學として解釈しようとするのだろうか。

以下では、冒頭で提示した規範性の問いを念頭に置きながら、カントを二人称的觀點から解釈するダーウォールの議論を追っていく。第一に、ダーウォールの二人称的觀點からの倫理學の基本構想について概観し、そのうえで第二に、カント倫理學が二人称的觀點からどのように解釈されるのかについて、具体的に自律、道徳的共同体（目的の国）および尊厳を取り上げて検討する。そして第三に、

ダーウォールがあえてなぜカントを二人称的觀點から解釈したのかについて、カントが規範性の問いに最も接近する箇所である『実践理性批判』（以下『第二批判』と略記）の「理性の事実」についてのダーウォールの解釈を取り上げ、論じる⁽⁷⁾。

第一節 ダーウォールの二人称的觀點からの倫理學

第一項 二人称的觀點の基本構想

ダーウォールの主張する「二人称的觀點」とは「互いの行為と意志について主張を行ったりその主張を認めたりするときに、あなたと私がとっている視点」(Darwall, 2006, p.3)⁽⁸⁾を意味しており、この視点にもとづく行為や感情には一貫して、主張の「提示」を媒介にした「私とあなたという構造」⁽⁹⁾がある。ダーウォールは自身の主張内容を『二人称的觀點…道徳性・尊敬・責任』の序文で次のように簡潔に述べている。

「……」二人称的觀點が道徳理論にとって根本的な意義をもっており、それなしでは多くの中心的な道徳的諸理念を十分に理解することはできない「……」。この本では、私は道徳的義務、責任（説明責任）、人格への尊敬と人格の尊厳、道徳的行為者のもつ際立った自由、これら一切は還元できない仕方で二人称的であることを論じる。さらに、二人称的觀點から道徳的義務

の權威およびこれらの諸理念を正当化しうる議論の提示を試みる。(Preface, x)

ダーウォールの主張する二人称的観点とは、その観点に立つことを各人が「選択可能な optional」(277) ものではなく、私たちが他者と要求や主張のやりとりを行う際には常にすでにとつてしまつていゝる立場である。それゆゑ先の規範性の源泉の問いにはこの立場からはさしあたり次のように答えることができるだろう。なぜ道徳的であるべきなのか。それは、他者が私に発した主張や要求が私に対して避けがたい最上の權威(規範性)をもつており、それが私に行為の理由と責任を生じさせるからである、と。

さて、ダーウォールによれば二人称的観点の一切は「二人称的理由 second-personal reason」「実践的權威 practical authority」「妥当な要求 valid demand」「〜に対する責任 responsibility to」という四つの概念のなす「相互定義的な環 interdefinable circle」(12) によつて理解される。この「環」はいずれの概念も他の三つの概念によつて定義される循環的な構造になっており、それを「拡大する」(277) ことで先の引用で具体的に示されていたような他の道徳的諸概念を「二人称的観点」から再定義し、正当化していく。

つづけてこれら四つの概念のうち、「二人称的理由」に着目し、二人称的観点からの倫理学の基本性格を明らかにしていこう。

第二項 行為の二人称的理由

まず出発点としたいのが、行為の理由にかんする「行為者中立的理由 agent-neutral reason」と「行為者相対的理由 agent-relative reason」というメタ倫理学上の区分である。⁽¹⁰⁾

「行為者中立的理由」とは、その理由を採用する行為者への言及なしに記述されうるような「客観的な理由」である (Gr9)。この理由を次のような場面に即して考えてみる。ある人Aが目前にいる人Bに足を踏まれており、足をどけさせる理由をBに与えようとしている (Gr)。このとき、BがAに「同情的な配慮」を抱き、Aの足の痛みは「悪い」ことで、Aの痛みを取り除くことは世界の状態を「より良く」することだから、という理由で行為するならば、この理由は「世界の状態に関する行為者中立的理由」(Gr10) である。それはこの理由が行為者Bへの言及を含んでおらず、Aの痛みを取り除くことのできる状況にあるならBだけでなく誰にとつても妥当する客観的な理由だからである。⁽¹¹⁾

他方で「行為者相対的理由」とは、その理由に従う行為者への言及を必然的に含んだ「主観的理由」である (Gr9)。今度は先ほどの場面において、AがBに足を動かすよう要求し、Bがそれを受けて、Aが自分Bに対して足をどかすように要求したから、という理由で行為するとしよう。この場合の行為の理由は足を踏み続けている行為者への言及を必然的に含むために、行為者相対的である。行為者相対的理由には、C. コースガードが論じる「アイデンティ

ティ」にもとづく「一人称的」理由も含まれるが、ダーウォルが重視するのはあくまで複数の理性的存在者の間での理由の「提示」を媒介にし、「私たちの他者への関係を構造化する」(11) ような「二人称的理由」である。この事例の場合、相手の要求に由来する行為の理由は要求を「提示 address」する「差し出し手 addresser」と「受け取り手 addressee」という二者間の関係内部でのみ有効に機能するものだから行為者相対的かつ二人称的である。

さて、この「二人称的理由」は先の四つの概念の「相互定義的な環」の内部で次のように定義される。

二人称的理由は、行為者に対する実践的権威をもったなんらかの妥当な主張や要求に由来しており、その理由にしたがう責任を行為者は有している。⁽¹³⁾

先ほどの場面に即して考えてみよう。Bが足を動かすための「二人称的理由」は、AがBに提示する「足を動かしてくれ」という「要求」に由来する。このとき、BがAのこの要求を「妥当な」ものとして認める―その要求に行為の理由としての無視しがたい規範性を認める―ならば、その要求の妥当性を保証するような「実践的権威」が「規範的な力」(1123)として前提されている。⁽¹⁴⁾さらにこの権威ゆえに、Bは単に要求に従う理由を与えられるだけでなく、その行為する「責任」をもAに対して負うことになる(11-12)。つま

りもしBが足をどけないのならば、AにはさらにBに「怒り」をぶつける、「非難する」などの「反応的態度 reactive attitude」を示す⁽¹⁵⁾ことで、Aに「対する責任」を問うことが正当化されるのである(88)。

第三項 二人称的観点において前提されるもの

では、この二人称的理由のやりとりが成立するための前提⁽¹⁶⁾とはなんだろうか。

まず、すでにみたように、他者からの要求にもとづく二人称的理由が妥当性をもち、行為者を拘束するのなら、両者の間には「権威と責任の関係」(8) もまた前提されていなければならない。この関係によって「二人称的理由」は、他者との関係の中で生じてくる文法的には二人称的な行為の理由―「助言」(10)や「強制」(23)―から区別される。たとえば二人称的理由は互いの間に前提された権威と責任ゆえに容易に無視されえない拘束力をもつ点で単なる「助言」とは異なる。だが同時に行行為者はその理由に従って行為するよう「強制」されているのではなく、あくまでそう「義務づけられている」(ibid.)のみであって、現実には要求に従わない自由がある。だからこそ、二人称的理由にしたがって行為する人は、不平や非難によってその責任が問われる可能性に開かれている。

敷衍するならば二人称的理由によって義務づけられた者は、「自由で理性的な行為者」として、規範性をもった要求を受け入れるように「自由な自己規定」(ibid.)を行うのでなければならない。す

なわち、二人称的理由による義務が生じているところでは、自由で理性的な行為者が、自らに責任を課し、二人称的理由によって自らを行為へと規定する能力、すなわち「二人称的能力 second-personal competence」(31)を有していることが前提される。

自らを自由な責任主体たらしめる能力としての二人称的能力の前提は、「事実上、意志の自律を前提する」(33)ことを意味するとダーウォルは述べる。というのも、自らを責任主体としてみなすためには、単になにもものにも規定されていないという意味での消極的な自由だけでなく、自らの意志が「自分自身に対する法則」(ibid)となるような意味での積極的な自由すなわち意志の自律もまた前提されねばならないからである。二人称的観点において他者の要求に従う際には、行為者は単に受動的にふるまうのではない。そうではなく、自律的に他者の要求を受け取り、自らをその要求に従うように義務づけ、責任を課す、自由で理性的な行為者がそこでは前提されるのである。

第二節 カント倫理学の二人称的解釈の可能性

第一項 自律への疑問

前節ではダーウォルの二人称的観点の基本構想を確認し、終わりでは二人称的観点からの倫理学は「権威と責任の関係」によって他者との関係性のなかにありながら、同時に各人は二人称的能力をも

つことによって自律の原理のもとにあることを指摘した。それゆえダーウォルによれば二人称的観点において他者からの要求に従うことは、「他者に対する義務」であるだけでなく、同時に自分で自分に課した責任を果たすという意味での「自己自身に対する義務」ですらある (33ff)。

だが、それでもなお二人称的理由にもとづく規範性は、他者からの要求の提示を媒介としており、自分自身ではなく他者による規定を受けるため、「自律よりはむしろ他律」ではないかという疑問は依然として残るようにも思われる (35)。ダーウォル自身も二人称的観点と自律との関係について次のような異論を想定している。

「……」もし二人称的な相互行為において自律が実現されるならば、それはいかにして意志自体の外にあるなものにも由来しない法則でありうるのだろうか (ibid)。

他者からの要求に対して、自ら自分自身に責任を課す際の能力を自律と呼ぶとしても、やはり自分自身の「意志の外」にある他者からの要求に依存するのであれば、「二人称的な相互行為」に他律の契機を読み込むことは容易であるようにも思われる。

第二項 二人称的な道徳的共同体における

自律とカント「目的の国」

この疑問に答えるためには、ダーウオルが個人間の二人称的関係を拡張した先に自由で理性的な行為者たちによる「道徳的共同体 moral community」を理念的に想定していることを踏まえる必要がある。自分自身をこの共同体の一員としてみなすとき、私たちは互いに共同体の他の成員に対して、次のような責任を負うことになる。すなわち、「対等に自由で理性的な人たちの共同体によって共有された観点」に立ち、「すべての人にその要求を与えることが賢明である sensible (合理的である reasonable)」と考えられるような要求」(118)に従う責任である。

ここで個人間の対人関係を越えて道徳的共同体を取り上げることとは、「私たちの」共同体を論じることにはなっても、そこに二人称性は見えてこないように思われるかもしれない。しかし、この共同体は「一人称複数的な」共同体である以前に、互いに要求を提示しあう私とあなた(たち)の共同体であるのだから、二人称的性格は減退することはない(9, cf. 102)。つまり、私が道徳的義務に従う責任を共同体に対して負うと述べるとき、同時に私は共同体の一員であるあなたたち一人一人に対して責任を負っているのである。

それゆえ、先の自律と二人称的観点に立つこととの結びつきへの疑義については以上の道徳的共同体の論理をもって次のように答えることができる。

「……」道徳的共同体の成員の二人称的観点は、他者のものであるとともに私自身によるものでもある。人は自分自身の行動を自由で理性的な人格として共有する視点から要求するのである(35. 強調引用者)。

ここであらためて確認すべきことは、二人称的観点とは、単にだれか特定の他者の観点ということだけを意味するのではなく、自身も含めた自由で理性的な行為者としての観点のもつ規範性までも意味していることである。すなわち二人称的観点に立つことは、単に他者が自分に対してなんらかの行為を要求してくるのではなく、自由で理性的な人として共有しうる観点に立ち、そこから自身が何をなすべきかを考慮し、自らに責任を課すこと、そしてそこで示される要求に最上の二人称的權威を認めることなのである。それゆえ二人称的理由にもとづく行為を採用することは、結果的には自由で理性的な存在者なら意志するであろう観点に立つことであるから、「二人称的な相互作用において、かつ「意志自体の外」に出ることなく、「自律が実現される」ことが可能となるのである。

さらに、カントの意志の自律が二人称的に解釈されることで、定言命法も二人称的観点と接合されていく。

ある人(どの人でも)が道徳的共同体の一成員という共有された観点からすべての人になすことが賢明であろう要求という観

点から見ると、定言命法や黄金律のような定言命法に類似した原理を解釈する最も自然な方法は、二人称的なものとなる。
(ibid.)

このようなダーウォールのカント解釈から予想されるように、二人称的観点における道徳的共同体はカントの「目的の国」(W433)と類比的に語られている。定言命法のいわゆる目的の国の定式は、「あらゆる理性的存在は自身の格率によっていつでもあたかも普遍的な目的の国の立法する成員であるかのように行為しなければならない」(W438)と命ずる。この「普遍的な目的の国の立法する成員」ならばなすであろう要求や行動に規範性を認め、それをなすように自らに責任を課すこと、これはすなわち先の引用にある「道徳的共同体の一成員という共有された観点からすべての人になすことが賢明であろう要求という観点」を意味している。さらに、ダーウォールによれば「目的の国」では「私たちはすべての人が理性的に選択しうるような原理にもとづいて行為すべきである」(307-308)という点が定言命法の他の定式よりも明示的に表現されている。それゆえ先の引用の「黄金律」(cf. 117n49)という言葉からもわかるようにダーウォールのカントの定言命法理解は、「目的の国」を中心として自己関係の互惠性を中心に据えた種類のものであると⁽¹⁷⁾言えるだろう。

第三項 人格の尊厳の二人称性とカント『道徳形而上学』
二人称的能力を前提することは結果として意志の自律を前提することを意味していた。同様に、他者への要求に規範性をもたせる二人称的権威を前提することで、結果的に私たちは一般的に「人格の尊厳(dignity of person)」として名指されていることがらを語っていることになる。ダーウォールは考える。

「私たちの人格としての尊厳には、尊敬を要求するだけの二人称的権威があり」(24)、「二人称的理由の提示は、いつでも人格の共通で基本的な尊厳を前提している」(275)。それゆえ、私たちが「他者の人格としての尊厳を尊敬する」とき、私たちは互いに実践的権威を有したものであるとして他者が「自分とその人との関係において対等な二人称的立場」にあると認めるのである(243)。すなわち、人格の尊厳は、他者からの尊敬を要求する根拠という意味で、要求を与えられた相手がその要求に従わざるをえない権威として、二人称的観点からの捉え直しが可能である。そして、互いの尊厳を認め合うことは、互いの要求に二人称的な権威を認めることでもあるのだから、この尊厳は二人称的な理由のやりとりが妥当性を有する際の根拠の位置を占めているといえよう。

ダーウォールによれば以上のような尊厳の二人称性はカントの『道徳形而上学』徳論第十一節「卑屈について」のテキストにも明示的に現れている(243)。

「……」人間は尊厳（絶対的な内的価値）をもっている。それによって人間は、自分自身に対する尊敬を世界の他の一切の理性的存在から強要し、自分自身をこの種のすべての存在と比較し、そして彼らと平等の立場において自分自身を評価することができる。

自身の人格における人間性は、それをすべての他の人から要求することができるような尊敬の客体である。（W43ff. 強調引用者）

カント自身が上記引用でさしあたり意図するのは、人間は自身を動物としてだけでなく、尊厳をもつ人格としてもみなすことを通して、「奴隷のような仕方」（W435）ではふるまわないこと、そして真の意味での「自己尊重」こそが義務であることを説明することである。だがダーウォルはここでの、尊厳によって他の理性的存在からの尊敬を「強要する *anröthigen / exact*」あるいは「要求する *fordern / demand*」という表現に着目する⁽¹⁸⁾ことで、『道徳形而上学の基礎づけ』（以下『基礎づけ』）や『第二批判』では明示されていない⁽¹⁸⁾、次のような態度を読み取ろうとしている。すなわち、「人格の尊厳は、尊敬という第一級の義務への服従に対する要求を提示するための二人称的な權威を含んでいる、という考えへの態度」をカントは示しているというのである（135）。なるほどカント自身も同書の第三十八節でも「人間は、あらゆる他者の人間性の尊厳を実践的

に承認するよう義務を課せられている」（W432）と述べているように、少なくとも『道徳形而上学』における尊厳の記述は他者からの道徳的な行為を要求する根拠として、ダーウォルが二人称的權威ということで意図していた事態を表現したものにもなっていると思われる。

むしろ、『道徳形而上学』の一節をもつてして、カント倫理学の対人的倫理学の要素を強調しすぎることは誤った解釈を呼び起こす恐れがあり、慎重な検討が必要である。だが少なくとも以上の論述を通して、カントの「目的の国」や尊厳といった概念にダーウォルの主張するような二人称的観点の萌芽を見てとり、そこから従来とは違ったカント倫理学の解釈を打ち立てていく可能性は十分に開かれていることが明らかとなったであろう。

第三節 「理性の事実」と二人称的観点

第一項 なぜカントには二人称的観点が必要か

前節の議論を踏まえてダーウォルはさらに踏み込んだ議論も行っている。すなわち、「なぜカントには二人称的観点が必要か⁽¹⁹⁾」というある種挑発的な問いを立てながら、カント倫理学の規範性の根拠づけにかかわる議論の理解は、二人称的観点からしか適切には行えない、とするのである。ではダーウォルはそれをどのように解釈したのだろうか。

なぜ道徳的であるべきなのかという問いにカントならばどう答えるだろう。おそらく「定言命法がそう命じているからだ」と、その絶対的かつ必然的な指令性（Vgl. IV 416）によって答えようとするのではないだろうか。しかしカント自身もくりかえし留意していることだが（Vgl. IV 425, 428f, 444f）、この回答は、そのような定言命法なるものは客観的実在性などもたず単に「幻想」（IV 445）にすぎないのではないか、また、定言命法に従って自律的に他の一切の欲求から自由に行為しているように見えても、実際はそれも仮言命法に従い何か他の目的や欲求のために行為しているにすぎないのではないか、このような懐疑の余地を残している。それゆえ、「道徳とは何か」といういわば「本質への問い」は定言命法の提示によつて説明されたとしても、依然としてそも、そのような定言命法はいかにして可能か」（IV 461. 強調引用者）という「存在への問い」は未決のまま残ることになる。⁽²⁰⁾

カントがこの後者の問題に直接に取り組むのは、『基礎づけ』第三章および『第二批判』の分析論であるが、以下では、特に後者における「理性の事実」についての議論に論点を絞りたい。カントの実践哲学に触れる多くの者にとつて難題であり続けている「理性の事実」を二人称的に解釈するとはいかなることなのであろうか。

まずカントが『第二批判』で「理性の事実」をどう論じていたかを概観しておく。『第二批判』第七節でカントは「純粹実践理性の根本法則」すなわち「君の意志の格率が、つねに同時に普遍的立

法の原理として妥当しうるよう行為せよ」（V 30, Vgl. IV 421）という定言命法を導いている。そしてまさにこの「根本法則の意識」の「否定しがたさ」（V 32）を表現するために、それを「理性の事実 Factum der Vernunft」（V 31）と呼んだ。このときそれが「事実」と称されることには次のような意味がある。⁽²¹⁾すなわち、「根本法則の意識」はなんら先行する「所与 Datum」に根拠をもつものではないこと、そしてそれは「演繹」されるのではなく、私たちに「押し迫ってくる」ことにより意識に「与えられる」（*erhd.*）ものだということ、である。さらに、この事実が「理性の事実」と呼ばれるのは、根本法則の意識は決して経験的に与えられるのではないことを強調するためである。この意識は「経験的事実」とは異なり、私たちがアプリアリに意識している、必然的に確実な「純粹理性の事実」である（V 47）。このようにカントは、定言命法の意識が「理性の事実」であると述べることで、定言命法は「それ自身正当化する根拠を必要としない」ものであり、「それだけですでに確立している」と主張する（*erhd.*）。そしてそれにより定言命法の「存在への問い」にかかわるあらゆる「演繹」は不可能かつ、——すでに事実としてその客観的実在性は「与えられた」のだから——不要であることを明らかにしたのである。

だがダーウォルによれば以上のような『第二批判』でのカントの議論は、定言命法の「存在への問い」に対する回答として十分に成功してはいない（213）。ダーウォルがそのように評価する際のポイ

ントを簡潔に述べるならば、「理性の事実」を認めたとしても、二人称的観点に立たない限りは、そこから定言命法や自律といった概念の实在性は確証されえない、という点にある。ではダーウォールは具体的にはカントの議論のどこに不備を見てとったのか。

第二項 「理性の事実の例」

まずダーウォールは『第二批判』第六節の末尾でカント自身が述べる次のような例を精査する。ひとりの「市民」(206)が、絞首刑を脅しに誠実な人物を陥れるための偽証をなすよう君主から要求されている場面を仮定してみる(230)。彼はおそらく自身の生存を求める自己愛のため現実には君主の要求に応じ、偽証を行うだろう。だがそれでも、「偽証しないことが可能なことは彼自身もためらわずに認めるはずだ」(231)とカントは断言する。この例がカントによって提示されるのは、ひとが道徳的な当為を意識するかぎり、どれほど強い欲求や傾向性が束になつていかかっても、それに屈せず、道徳に従うことができる、ということ、そしてそれゆえ道徳法則には他のなにものにも勝る「最上の権威がある」(238)ということの実感を読者に持たせるためである。ダーウォールはこの例をだれもが「自分自身に誠実になれば」(237)認めざるをえないものとして、—カントはそうは呼ばないが—「理性の事実の例」(239)と呼んでいる。

さて、もし上記の例を「理性の事実の例」と呼び、カントが「理

性の事実」に込めた内容がこの例に込められているとするダーウォールの理解が正しければ、「理性の事実」は、先の「根本法則」や意志の自律と必ずしも関係づけられずとも十分に認められうることになる。たとえばW・D・ロスに代表される「義務論的直観主義者」(239)ならば、その行為の「内的な正しさ」(222)を義務として直観することで、「道徳法則が最上の権威をもつこと」を認め、生存の欲求がどんなに強くとも君主の命令を拒否すべきだし、実際にそう行なうことができると判断できる。だがこの際、その行為する理由は、義務や法則のもつ内的な正しさおよび道徳的直観にあるのであって、カントがその实在性を明らかにしようとした定言命法や意志の自律にあるのではない。したがってこの「理性の事実の例」は、最上の権威をもつなんらかの道徳的な規範の「存在への問い」には答えても、定言命法や自律の「存在への問い」にはなにも答えていないことになる。確かに私たちが先の例のように道徳的な義務による絶対的な拘束を意識するとき、必ずしも同時に定言命法を想定することがそれに伴っているわけではない。それゆえダーウォールは「理性の事実」から根本法則や意志の自律へと至る明確な道筋はないように思われる」(239)とさしあたり『第二批判』の議論の不備を指摘してみせる。

第三項 「理性の事実」の二人称的解釈

しかし、上述した不備はダーウォールによればそう「思われる」だ

けのものであって、実際は「道徳的義務の二人称的観点」つまり「道徳的義務と責任の概念的な結合」に頼ることで問題は解消できる (ibid.)。

本稿第一節第二項で見たように「二人称的観点」では、道徳的に行為する二人称的理由および義務には常にそう行為する責任が伴っているものであった。この点を踏まえ、再度「理性の事実の例」を見てみよう。すると、市民が、¹誠実な人物に対する偽証を行うべきでない、君主の要求を拒否すべきだ²という義務をもつことは、二人称的観点に立てば、そうするように市民が責任を負っていることを同時に意味することになる。このとき二人称的観点からすれば市民は自分自身もその一員である道徳的共同体によってそう要求され、責任を課されていることになろう。だからもし市民が自分の命を守るために偽証を行ってしまうとすれば、偽証を行ったことについて道徳的共同体に対する道徳的な責任が問われる――なぜ嘘をついてしまったんだ、君は嘘などつくべきじゃなかったんだ――ことになるだろう。⁽²²⁾

この際重要なのは道徳的に責任を問いうるためには、単に市民が偽証以外の「別の選択肢に開かれていた」⁽²³⁾という意味で――なものにも規定されていないという消極的な意味で――「自由」なだけでは不十分な点である。すなわち、市民は自分は君主の要求を拒否すべきだったし、実際に拒否するよう自身を規定しえたということを知っている立場にあったことが不可欠なのである。さらにこの

ように別の選択肢を自分がとるべきであったことを知りうるためには、行為者自身が自ら自分自身をそれによって規定することができ、――すなわち、自律的な――道徳的推論の形式が存在しなければならぬ。そしてここで要求されている形式こそが、カントによって提示された定言命法（根本法則）であり、その際に求められる意味での自由が意志の自律なのである。すなわち、市民が定言命法に則って何をなすべきかを考えた上で、ある行為を「自由に」選び取る――少なくともそうすることができ、――そのような場合にのみ、責任を問うことができるのである。

ここまでの議論によって「なぜカントには二人称的観点が必要か」というダーウオルが立てた問いに次のように答えることができる。カントを二人称的観点から見えないならば、「理性の事実の例」から「根本法則の意識」へと至る道筋を説明することができない。だが二人称的観点をとること、道徳的に義務づけられた人は同時に責任を問われうる存在となった。そして道徳的な意味で責任を問うためには、単にその人には別の行為を選択する余地があったという意味での「自由」ではなく、その人が定言命法を通して自分自身をなすべき行為へと規定しえたという意味での「自由」（意志の自律）が不可欠である。したがって二人称的観点をとることではじめてカントは、「理性の事実」を定言命法の「存在への問い」の回答として有意義に機能させることが可能となるのである。⁽²³⁾

結びに代えて―残る問題と「促し」―

本稿で追ってきた二人称的観点からの一連のカント解釈は、次のような帰結を有している。すなわち、

このような考え方において根本的なものは、私が主張してきたような人格の尊厳の本質的な側面である二人称的な權威、すなわち互いに主張と要求とをなすための（平等な）權威である。意志の自律と形式的な熟慮過程の必然性はこのより根本的な理念―二人称的權威の可能性の必然的条件そして二人称的関係を媒介するために必要なもの―から導出されるderiveなのであって、その反対ではない（242）。

カント自身の『第二批判』の議論ではより上位の根拠からの「導出」が不可能だとされたがゆえに「理性の事実」によって担保されていた定言命法（「形式的な熟慮過程」）と自律だが、先ほどのダーウオルの議論によれば、実際は二人称的観点から道德的義務と責任の結びつきを明らかにして始めて、それらが「幻想」でないことが示された。すなわち、このことが意味するのは「二人称的權威の可能性の必然的条件」であるようなより根本的な理念、つまり「人格の尊厳」によって始めて定言命法や自律は「導出される」ということである。

カント自身の議論構成から言えば、「尊厳」とは「普遍的に法則を立法する能力」（Kant）のうちにあり、「自律が人間やあらゆる理性的存在の尊厳の根拠」（Kant, 強調引用者）であった。だが二人称的観点からみれば事態はその反対である。むしろ二人称的な權威と結びついた人格の尊厳が根拠に置かれることから、意志の自律や定言命法は導出される。二人称的観点からのカント倫理学解釈はこのように対法的倫理学としての面よりも対人的倫理学の面をより根本に据えた解釈としてカント倫理学を再構成するのである⁽²⁴⁾。

ただし、ダーウオルによるこの再構成にも問題は残る。というのも、人格の尊厳をいかにして正当化するかという課題が解決されねば、定言命法は「幻想」ではないかと問うたのと同様に、尊厳をはじめとする二人称的な規範性全体が空虚な理念にすぎないのではないかという問いを払拭できないからである（242）。

ではダーウオルはそれをどう克服しようとするのか。手がかりは次のような言葉にあると思われる。

私たちは他の自由で理性的な行為者の促し、summonsを認めるとき、事実上、理性の事実に直面している。（33, 強調引用者）

ここで唐突に登場する「促し」という語は『自然法の基礎』において他者論を展開する際のフィヒテの用語Auforderung⁽²⁵⁾に由来し、「自由で理性的で（二人称的な能力をもつ）行為者への二人称

的理由の提示の試み」(256)を意味する。「理性の事実」の意味をさしあたり、否定しがたいしかたで私たちに押し迫ってき、それ自身ではより上位のものによる正当化を必要としないもの、として押さえておく。するとこの引用で言われている事態は、他者からの要求や主張(「促し」)に無視しがたい二人称的な權威を認めるということこそが、まったく否定しがたい事実として押し迫ってくるものであるということを意味しているものと読める。すなわち、二人称的観点は私たちがさまざまな立場のうちから「選択可能な」ものではなく、すでに他者からの促しというかたちで直面している事実なのであり、これは「幻想」ではありえない。ダーウォールの二人称的観点はこの「促し」の地点を出発点として、カント倫理学を始めとしてさまざまな倫理学を構想しなすことを私たちに要求するのである。

注

- (1) Korsgaard, Christine, *The Sources of Normativity*, Cambridge University Press, 1996, p.18. (寺田俊郎監訳『義務とアイデンティティの倫理学』岩波書店、二〇〇五年、二二頁。)
- (2) しはしはWhy be moral?と呼ばれるこの問いの一九六〇年代から九〇年代初頭までの議論の変遷については以下を参照のこと。川本隆史「三酔人倫問答―《ホワイ・ビー・モラル》文獻案内に代えて」安彦一恵、大庭健、溝口宏平編『道徳の理由―Why be moral?―』昭和堂、一九九二年、一九二―二二三頁。
- (3) 久重忠夫『非対称の倫理』専修大学出版局、二〇〇二年、三三頁。

- (4) 久重自身はこの対人的倫理学の立場に立ち、自らの立場を、日常性に還元できない他者に回復不可能なまでの苦しみを与えてしまった危機的な事態を前提とした「危機の倫理学」「非対称の倫理」あるいは「受苦の倫理学」と表現している(同九頁)。

- (5) カントの著作からの引用、参照はいわゆるアカデミー版カント全集の巻数とページ数を併記して本文中に挿入する。

- (6) 中島義道「なぜカントには〈他者論〉がないのか」、池上哲司他編『自己と他者―さまざまな自己との出合い―』、昭和堂、一九九四年、一五六―一七五頁、および滝浦静雄『自分』と「他人」をどうみるか 新しい哲学入門、日本放送出版協会、一九九〇年、二二〇頁を参照。

- (7) 本稿全体の解釈方針について一点付言しておく。本稿はカントのテキストの厳密な解釈を目指すものではない。あくまでダーウォールのような現代倫理学における特徴的な立場からカント倫理学を見たときに明らかになる論点を取り出すことを目指している。

- (8) Darwall, Stephen, *The Second-Person Standpoint: Morality, Respect, and Accountability*, Harvard University Press, 2006, p.3. 以下ダーウォールの同書からの引用、参照は本文中にページ数のみを挿入する。なお、同書の脚注からの引用の場合は、ページ数のあとに8のように注の番号を付記した。

- (9) ダーウォールが展開したこのような議論は現在大きな注目を浴びており、その妥当性および可能性の検証が様々な角度から議論されている最中である。たとえば、同書にのづく『Ethics, Vol.118, No. 1, University of Chicago Press, 2007』および『Philosophy and Phenomenological Research, Vol. 81, No.1, International Phenomenological Society, 2010』はそれぞれ複数の評者を招いての特集が組まれているほか、ハーバーマスの比較検討(Koppelman, Andrew, Darwall, Habermas, and the Fluidity of Respect, in: *Ratio Juris*, Vol.26, No.4, Basil Blackwell, 2013, pp.523-37.)や、道徳の規範性にのづくの「二人称的観点それぞれからの検証などの研究(Smith, H. William, *The Phenomenology of Moral Normativity*, Routledge, 2012.)があげられる。

- (10) 成田和信「行為者中立的／行為者相対的」『現代倫理学事典』、弘文堂、二〇〇六年、二六一―二頁も参照のこと。
- (11) 行為者中立的かつ「非人称的」な理由を重視し「規範的実在論」の立場に立つ論者にはT. ネーゲルの名を挙げることがある。Nagel, Thomas, *The View from Nowhere*, Oxford University Press, 1986, p.139. (中村昇他訳『まっぴらなところからの眺め』、春秋社、二〇〇九年、一二七頁。)
- (12) Korsgaard, 1996, p.16. (邦訳一九頁)
- (13) Darwall, Stephen, Authority and Second-Personal Reasons for Acting, in: *Morality, Authority, and Law: Essays in Second-Personal Ethics I*, Oxford University Press, 2013, p.141. 強調は引用者による。当該箇所では、「二人称的理由」以外の三つの概念も、それぞれこの「環」の内部で定義されている。
- (14) ダーウォルの議論において、「權威 authority」は日本語の語感が示すような上位者による問答無用の「強制」―これは物理的強制力を伴う「権力 power」である―ではなく、ついで示したような「規範的な力」として受け手の自由の余地を残す意味で用いられていることに注意していただきたい。以下の拙論も参照のこと。小川泰治「S. ダーウォル『二人称的観点』における実践的權威とその他者」、『哲学世界』、第三七号、二〇一五年、二五―三七頁。
- (15) Strawson, P. F., Freedom and Resentment, in: *Studies in the Philosophy of Thought and Action*, Oxford University Press, 1968, pp.187-211. (法野谷俊哉訳「自由と怒り」、門脇俊介、野矢茂樹監訳「自由と行為の哲学」、春秋社、二〇一〇年。) ダーウォルはこのストローソンの議論から大きな影響を受けている。
- (16) ダーウォルの基本戦略は、「規範的適切性条件 normative felicity conditions」つまり「二人称的理由が現実存在し、それが二人称的な提示をおとして与えられることに成功するために真でなければならぬもの」(4)を追及するものである。それゆえ二人称的観点における「前提 presupposition」を明らかにするとうかたで議論が進められていく。
- (17) ダーウォルのこのような解釈は「契約主義 contractualism」(306)的なものである。
- (18) カントの著作間での「尊敬」および「尊厳」概念の変遷についてダーウォルの議論は以下を参照のこと。Darwall, Stephen, Kant on Respect, Dignity, and the Duty of Respect, in: *Honor, History, and Relationship: Essays in Second-Personal Ethics II*, Oxford University Press, 2013, pp.247-270.
- (19) Darwall, Stephen, Why Kant Needs the Second-Person Standpoint, in: Thomas E. Hill, Jr.(ed.), *The Blackwell Guide to Kant's Ethics*, Wiley-Blackwell, 2009, pp.138-157.
- (20) つのようにかントにおけるWhy be moralの問題を「本質への問い」と「存在への問い」に分けて考えるという着想は以下の論文から得た。川谷茂樹「『ホワイ・ビー・モラル?』とカント」、『倫理学年報』、五四号、二〇〇五年、三七頁。
- (21) 以下の「理性の事実」の特徴の整理に際して、次の文献を参照した。Klingeld, Pauline, Moral consciousness and the 'fact of reason', in: Reath, Andrews/ Timmermann, Jens(eds.), *Kant's Critique of Practical Reason: A Critical Guide*, Cambridge University Press, 2010, p.59.
- (22) もちろん、このような事態が現実生じた場合は、単に偽証を行わず甘んじて死を受け入れることが道徳的義務を遂行することになるとは思われない。現実には、市民は他の市民たちと一緒にそのような不道徳な命令を下す君主に対し、その責任を激しく問うことになるだろう。君主は君主としての共同体に対する責任を果たしていないからである。
- (23) ダーウォルの以上のカント解釈の問題について一点だけ述べておくならば、なるほど確かに定言命法を想定せずとも様々な仕方では道徳のもつ最上の權威にアプローチすることができ。それゆえダーウォルの言う「理性の事実の例」からは「根本法則の意識」は証示されないことには同意できる。だが例によって示される道徳規範が、カント的な定言命法や根本法則、自律でなければならないことはすでに「理性の事実」を提示する以前の『第二批判』第六節までの議論で示唆されている、と私は考える。ダー

ウォール自身が「もちろん、もし。理性の事実。それ自体が定言命法の意識を含んでいるならば、そこに踏むべきステップはない」(239a37)と述べている事態のほうがカントのテキスト解釈としては正しいと思われる。

- (24) このような解釈の方針自体は人間性の定式を定言命法の諸定式のうちでもっとも根本的なものとしてとらえるというしかたで、ダーウォール以前にもあった。Cf. Korsgaard, Christin, *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge University Press, 1996. それゆえ、ダーウォールのカント解釈は大きな意味では、人間性の定式や尊厳を根本概念に据えることによって、カント倫理学を捉えようとする一連の解釈の系譜にあるといえよう。だが、他方で近年のカント研究ではオリバー・ゼンゼンがカントの尊厳および尊厳への尊敬概念を絶対的なものとして承認するある種の対人的倫理学的な理解を明確に否定し、どこまでも道徳法則との関係でとらえようとする解釈があり、これはダーウォールのカント理解に対する反論になりうる。Cf. Sensen, Oliver, *Kant on Human Dignity*, Walter De Gruyter, 2011.

- (25) Fichte, J. G., *Grundlage des Naturrechts nach Prinzipien der Wissenschaftslehre*, Felix Meiner, 1960. フィヒテについてのダーウォールの議論は、実際はより精密に、尊厳概念の正当化を二人称的観点および理論理性に対する実践理性の優位といった論点から行われている。その検討は今後の課題とした。Cf. Darwall, 2006, ch.10-11, pp.243-299. / Darwall, Stephen, *Fichte and the Second-Person Standpoint*, in: Darwall, 2013, pp.222-246.

*本稿は「『二人称的観点』からのカント倫理学との対峙—ダーウォールによる『理性の事実』の二人称的解釈をめぐって—」と題し二〇一四年六月二二日の第八〇回上智大学哲学会にて行った研究発表の原稿に、大幅な加筆・修正を行ったものである。当日ならびにその前後にコメントをいただいた方々に深く御礼申し上げる。